

探求! マイナー エマージェンシー

マイナーエマージェンシーとは、「ショック」「脳出血」「心筋梗塞」「急性腹症」以外の病態を指すと言われています。医療者にとってちょっとしたこと（マイナーな状態）ではあっても、患者さんはどうしてよいのかわからず困り果てて外来を受診されます。

例えば、深夜2時頃に眠っていたところ、急に鼻から血が出て出血が止まらず困り、家族に連れられ医療機関に直接自家用車で受診した患者さんがいるとします。そんなとき、医療者として「自分の専門外だから」「院内に耳鼻咽喉科医がいないから」と断るのは簡単かもしれませんが、患者さんは次にどうすればよいかわからずより困ってしまいます。

断ってしまう理由として一番多いのが、「専門ではない」よりも「適切に対処できるか診療に自信がない」です。筆者も研修医時代に、鼻の中にビーズを入れた3歳男児が救急外来を受診した際に、なすすべなく耳鼻咽喉科当直医を救急外来まで呼びました。呼ばれた耳鼻咽喉科医は準備後、お母さん・看護師さんに指示を出し、一瞬で鼻に詰まったビーズを除去し、「よし、もう大丈夫」と述べて颯爽と救急外来から去っていきました。去り際に、「先生もちょっと勉強すればできるようになるよ」とおっしゃっていましたが、それは若かった筆者に対して「頑張れよ!」というエールだったのか、「こんなことで俺を呼ぶなよ、救急でもっと頑張れよ」という皮肉だったのかはいまだにわかりませんが、帰り際に親子が見せたあの笑顔は忘れることはできません。

その後、教科書を読んだり、専門医にちょっとしたコツを教えてもらったりしながら少しずつできる範囲を増やし、いつしか専門医に依頼していた疾患・外傷群に関しても自分だけで対応できるようになり、ますますマイナーエマージェンシーの領域の面白さを実感しました。また、米国の救急後期研修医+指導医が定期的に集まって行っているマイナーエマージェンシーの勉強会に参加する機会もありました。多くの文献を解析しつつ、シミュレーターを通して地域・病院に合わせた効率のよい、成功率高い処置をみんなで考えている姿に深く感銘を受け、帰国後はこれを実践すべくマイナーエマージェンシーの研修医教育を定期的に行っています。

マイナーエマージェンシーにおいて、まずは目の前で困っている患者さんに手を差し伸べ、自分の持てるスキルを駆使して、あまり時間をかけずにスッキリ解決できるととてもカッコいいと思います。専門医でなくともちょっとした知識、技術・コツを学び、実際に臨床の現場で実践し、患者さんの悩みを無事解決できたときに、「あ～医者やっててよかった～」と医師としての醍醐味（矜持）を再確認することができます！さらにみなさんが夜間当直帯を頑張ることで、専門医を温存することができます。このことは「持ちつ持たれつ」の地域医療においては非常に大切なことだと思います。

本特集では多くの先生方に、日常起こりうるさまざまなマイナーエマージェンシーに対して、診療のちょっとしたコツや注意点をまとめていただきました。本特集を通して、「あ～これなら自分でもできるかな」とか「こんなやり方があるんだ、この方法で次回患者さんに対応しよう」と少しでも診療の手助けになればと思います。さあ、本特集を通じて、マイナーエマージェンシーを探求してみませんか？

小淵 岳恒（福井大学医学部附属病院救急部・総合診療部）